

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



6

よろこびの知らせ  
第6集

目 次

回復の神 .....	1
エズラ 1:1-6	
仕事に取りかかった .....	10
ハガイ 1:12-15	
ネヘミヤの祈り .....	19
ネヘミヤ 1:4-11	
“I Love You.” .....	28
マラキ 1:1-5	

ここに収められたのは、2020年1~2月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

# 回復の神

## エズラ 1:1-6

1:1 ペルシヤの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシヤの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。

1:2 「ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。』」

1:3 あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。

1:4 残る者はみな、その者を援助するようにせよ。どこに寄留しているにしても、その所から、その土地の人々が、エルサレムにある神の宮のために進んでささげるささげ物のほか、銀、金、財貨、家畜をもって援助せよ。』」

1:5 そこで、ユダとベニヤミンの一族のかしらたち、祭司たち、レビ人たち、すなわち、神にその霊を奮い立たされた者はみな、エルサレムにある主の宮を建てるために上って行こうと立ち上がった。

1:6 彼らの回りの人々はみな、銀の器具、金、財貨、家畜、えりすぐりの品々、そのほか進んでささげるあらゆるささげ物をもって彼らを力づけた。

### 一、エルサレムへの帰還

紀元前 586 年、エルサレムが神殿もろとも破壊され、主だった人々はバビロンに連れて行かれました。祖国を失った人たちの悲しみはどんなに大きなものだったことでしょうか。詩篇 137 篇はそうした人々の気持ちをよく表しています。

バビロンの川のほとり、そこで、私たちはすわり、シオンを思い出して泣いた。

その柳の木々に私たちは立琴を掛けた。

それは、私たちを捕え移した者たちが、そこで、私たちに歌を求め、私たちを苦しめる者たちが、興を求めて、「シオンの歌を一つ歌え。」と言ったからだ。

私たちがどうして、異国の地にあつて主の歌を歌えようか。

エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。

もしも、私がおまえを思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。

ユダヤの人々がそのような目に遭ったのは、神の民として選ばれていながら、まことの神に背を向け、偶像を拝み、社会に不正を蔓延させ、敬虔な生活を捨てたからでした。人々は、国を失い、外国の支配を受けるようになってはじめて、自分たちの罪や不信仰、不道徳や不敬虔に気付き、真剣に悔い改めるようになりました。神もまた、ご自分の民をあわれんでくださいました。

ペルシャがバビロンに代わって中東を治めるようになった時、ペルシャのクロス王は、勅令を出して、ユダヤの人々がエルサレムに帰り、神殿と町とを建て直すことを許しました。その勅令はエズラ 1:2-4 にある通りです。聖書に「エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシャの王クロスの霊を奮い立たせた」（1節）とあるように、クロス王の勅令の背後には神がおられました。神は預言者エレミヤを通してこう預言しておられました。「バビロンに七十年の満ちるころ、

わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。」

（エレミヤ 29:10）この預言がエレミヤに与えられたのはエホヤキム王がヨシヤ王のあとを継いで王になってまもなくの頃でした。エホヤキムの即位は紀元前 609 年でしたから、この預言は紀元前 608 年ごろでしょう。それから 70 年後は紀元前 538 年になり、それはちょうどクロス王の勅令が出された年です。神の言葉は、見事に、その年数まで変わらず実現しています。イザヤ書 55:11 に「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしくわたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」とある通りです。

いったん捕虜となって遠い国に連れていかれた人々がもとの場所に帰ることを許される。そんなことは歴史の中で、どの民族にも起こらなかったことでした。ところが、ユダヤの人々にそれが実現しているのです。そしてそれは、歴史を導いておられる神の力とともに、ご自分の民をあわれみ、赦し、癒やしてくださる神の愛を、私たちに教えています。聖書は「主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない」（詩篇 103:9）と言い、主ご自身も、「わたしは殺し、また生かす。わたしは傷つけ、またいやす」（申命記 32:39）と言っておられます。ユダヤの人々は 70 年の間「バビロン捕囚」という懲らしめの期間を過ごしましたが、もう一

度、神のあわれみによって癒やしと回復を体験したのです。

聖書には、神に赦され、癒やされ、再び神のために生きた信仰者たちのことが数多く書かれています。ダビデは自分の部下の妻を奪い、その部下を戦場で死なせるといふ、ダビデらしくない、卑怯なことをして、大きな罪を犯しました。しかし、真剣に悔い改めたとき、神は彼を赦し、その王位を回復してくださいました。イエスの弟子ペテロは、自分を守るために「イエスなどという人は知らない」と三度も言って、自分の主を否定しました。しかし、その後聖霊を受けて、初代教会の指導者となりました。ペテロと同時代の人パウロは、キリストを信じる者を捕まえては投獄していた急進派のパリサイ人でした。しかし、イエスは彼の罪を赦し、彼をご自分の使徒として、世界中に福音を宣べ伝えさせました。

神はじつに、回復の神であり、聖書は回復の物語です。アダムの罪のために失われた神の義と聖さは、キリストによって回復され、エデンの園はキリストの再臨によって回復します。ノアの物語は、人の罪によって破壊された世界が回復したことを告げています。そして、ユダヤの人々の捕囚からの帰還もまた、神が回復の神であることを力強く教えているのです。

人生において、失敗や挫折を体験しない人はおそらく誰もいないでしょう。誰もが、落胆したり、行き詰まりを覚えたりするものです。信仰者といえども、世の中と妥協し、大きな罪を犯して信仰から離れてしまうことも

あるのです。もし、神が回復の神でなければ、そんなとき、何の希望も回復もなく終わってしまっていたでしょう。しかし、神は、私たちの心を奮い立たせ、また、人々を通して具体的な助けを与え、私たちをどん底から立ち上がらせてくださいました。私たちは神の恵みによって身も心も強められ、人間関係においても癒やされてきました。皆さんも、そのような回復の恵みを与えていただいたことと思います。

大阪に弟子教会という教会があるのですが、以前、その牧師、金沢泰治先生のお話を聞く機会がありました。先生は、高校に入ったとたん学校をやめ暴走族に加わり少年鑑別所に入れられました。そのあと、山口組系の暴力団員になり野球賭博などで組のための資金集めなどをしていました。覚醒剤や大麻に溺れたりもしました。しかし、組同士の抗争に巻き込まれ、九死に一生を得、組を抜ける決意をするのですが、なかなかうまくいきませんでした。そんなとき、父親が病気で亡くなったことを通して、信仰に導かれました。先生の両親はクリスチャンで、先生も、中学生になって不良仲間に入るまでは両親と一緒に教会に行っていたのです。先生は、母親の祈りが自分をクリスチャンにしたと話していました。

先生はその話をこのように結びました。「どんな人もやりなおせます。キリストを信じる信仰によってやりなおせないものはありません。僕も人生をやり直せました。誰でも、イエスさまを信じるなら人生をやり直すことができます。決して、もう遅いということはありません」

という言葉で結びました。その通りです。神は回復の神だからです。

## 二、神殿の再建

さて、クロス王は、シェシュバツアルに権限を与えて神殿を再建するように命じました（1:8、10）。ところが、シェシュバツアルの名は、エズラ記の2章以降は出てきません。2:2に「ゼルバベルといっしょに帰って来た者は…」とあって、ユダヤの指導者は「ゼルバベル」になっています。「シェシュバツアル」と「ゼルバベル」は同一人物で、一方はペルシャで呼ばれていた名前、もう一方はユダヤで呼ばれていた名前だったと思われます。

「ゼルバベル」という名には「バビロン生まれ」という意味があります。ゼルバベルとその一行はみなバビロンで生まれたユダヤ人二世だったのです。神は、ご自分の宮の再建を、バビロン生まれの新しい世代に任せられたのです。

神殿の再建は、単なる建物の再建とは違って、長い間行われなかった礼拝を再開することでしたから、神殿での礼拝を司る祭司やそれを助けるレビ人が数多くエルサレムに向かいました。

ペルシャはユダヤの人々に寛容でしたから、ユダヤの人々はペルシャで安定した生活ができました。エルサレムがいくら父祖の地だといっても、バビロン生まれの人々にとっては見知らぬ土地でした。しかもそこは戦争で荒れ果てたところでした。「なにも今さらエルサレムに行かなくても…」と考えたとしても不思議ではありません



せん。実際、ペルシャに残ったユダヤの人たちのほうがエルサレムに帰った人たちよもはるかに多かったのです。しかし、ゼルバベルと一緒にエルサレムにやってきた人たちは皆、「神にその霊を奮い立たされた者」(1:5)でした。クロス王の霊を奮い立たせた神は、神殿の再建を願う思いを持つ人々の霊をも奮い立たせてくださったのです。私たちの霊を生かし、強め、支えてくださるのはまさに聖霊の働きですが、聖霊の助け無しには、困難を乗り越え、忍耐して神のために働くことができません。私たちも、神のために働こうする時には、聖霊の力をいただく必要があります。

エルサレムに帰ってきた人々は自分たちの生活もままならない状態でしたが、神殿再建のために身を粉にして働きました。自分たちのことよりも、神のことを第一にしたのです。エズラ3章には、そのようにして、神殿の基礎が据えられたことが書かれています。その定礎式の時人々は「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに」と言って主なる神を賛美しました(エズラ3:11)。その賛美の声は遠くまで響いたとあります(同3:13)。

「いつくしみ」と訳されている言葉には「善」あるいは「善意」、「恵み」と訳されている言葉には「誠実な愛」という意味があります。けれども、これらの言葉の意味をいくら学んだところで、実際にそれを体験しなければ、神は善であって、私たちに善をなしてくださる。たとえ、私たちが不誠実であっても、神は私たちに約束

されたことを違えずに、私たちに誠実を尽くしてください  
ということは、ほんとうの意味では分かりません。詩篇  
34:8に「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ」と  
ありますが、これは英語では “Taste and see that the  
LORD is good.” と訳されています。「味わう」というのは  
「体験する」ということですが、様々な困難な中でもな  
お主に信頼してはじめて、私たちは “The LORD is good.”  
ということを経験できる、味わうことができるのです。  
私たちが主のいつくしみと恵みを、そのようにして「味  
わい」たいと思います。

ペルシャからエルサレムに戻ってきた人々は、ユダヤ  
人二世でしたので、私は、エズラ書を読むたびに、カル  
フォルニアの日系二世の方々のことを思い起こします。  
山崎豊子の小説『二つの祖国』にあるように、日米戦争  
が始まったとき、アメリカにいる日本人は「敵性外国  
人」とみなされ、人里離れた収容所に入れられました。  
そのときまだ子どもや若者だった二世の人々も、アメリ  
カ市民であるにもかかわらず、同じように収容所に入れ  
られました。若者たちは兵士となって戦地に行くこと  
によってアメリカへの忠誠を示すよう強いられました。二  
世の多くがドイツ軍と戦うためにヨーロッパ戦線に送ら  
れました。戦争が終わり、日系人は収容所から出てしま  
いましたが、家も土地もみな人手に渡っており、ゼロからの  
出発をしなければなりませんでした。

そんな中でもクリスチャンの二世たちは、自分たちの  
ことを後回しにして、戦争中閉鎖されていた日系人教会

の再建のために働きました。そのころ多く日系人は農業に従事していましたが、日が暮れるまで畑で働いた後、ドロのついた手をやっと洗って教会に集まり、教会の再建のために祈り、また、働きました。そのようにして、カリフォルニアの日系人教会は再建されていったのです。

今では、日系二世の方々ほとんど世を去りました。しかし、二世の信仰者の方々の忠実な働き、彼らが流した血と汗と涙を忘れてはならないと思います。豊かで自由な環境の中にいる私たちは、自分のためには涙を流しシェイプアップのためには汗を流すかもしれませんが、まことの神を知らない人々のために涙して祈ることや、主の働きのために汗して働くことを忘れてはいないでしょうか。「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。」（詩篇 126:5）エルサレムに帰ってきた人々は涙をもって種を蒔き、収穫の喜びに与りました。私たちも、そうした人々の信仰に倣いたいと思います。

### （祈り）

いつくしみと恵みの神さま。あなたは、あなたに立ち返る者を、あわれみ、恵み、赦して、もう一度立たせてくださいます。また、あなたを第一にする者には、あなたのいつくしみと恵みを注いでくださいます。あなたが善きお方で、善きことをしてください。そのことを確信し、この週も歩むことができますよう、私たちを導いてください。主イエスのお名前です。

# 仕事に取りかかった

ハガイ 1:12-15

1:12 そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツアダクの子、大祭司ヨシュアと、民のすべての残りの者とは、彼らの神、主の御声と、また、彼らの神、主が遣わされた預言者ハガイのことばとに聞き従った。民は主の前で恐れた。

1:13 そのとき、主の使いハガイは、主から使命を受けて、民にこう言った。「わたしは、あなたがたとともにいる。――主の御告げ。――」

1:14 主は、シェアルティエルの子、ユダの総督ゼルバベルの心と、エホツアダクの子、大祭司ヨシュアの心と、民のすべての残りの者の心とを奮い立たせたので、彼らは彼らの神、万軍の主の宮に行って、仕事に取りかかった。

1:15 それは第六の月の二十四日のことであつた。

## 一、妨害と困難

バビロンに捕虜となって連れていかれたユダヤの人々は、ペルシャのクロス王の勅令によって、エルサレムに帰り、主の宮の再建にとりかかりました。それは順調に進み、短い期間に基礎が据えられました。人々は主を賛美し、主に感謝し、互いに喜び合いました（エズラ 3:11）。

ところが、すでにエルサレム周辺に住んでいた人々はユダヤの人々の帰還を好まず、神殿の再建を妨害しました。彼らはペルシャの「議官たちを買収して」（エズラ 4:5）、クロス王の勅令が実行されないようにしました。そのうち、ペルシャの政治はクロス王から息子のカンビュセスに譲られ、クロス王の勅令が忘れられるように

なりました。カンビュセスのあと、ペルシャの王となったダリヨスの第二年目まで、神殿の工事は中断されたままとなりました（エズラ 4:24）。このダリヨス王は「ダレイオス大王」あるいは「ダレイオス一世」と呼ばれる人で、紀元前 522 年に即位しましたから、その二年目は紀元前 520 年になります。クロス王の勅令が紀元前 538 年、神殿の基礎ができたのが紀元前 535 年ころですから、神殿工事はおよそ 15 年ほど中断されていたことになります。

工事が中断されていた 15 年の間、ゼルバベルは様々に手を尽くし、自らもペルシャの都とエルサレムを行き来したことでしょう。けれども、政治的な努力だけでは、物事は打開しませんでした。そうした間に、人々は最初に持っていた情熱を失くし、あきらめの気持ちを持つようになったのです。「今はまだ時ではない。まずは自分たちの生活を安定させよう。神殿の工事はそれからでもいいのではないか」と考えるようになりました。

私たちの人生には、どんな事柄においても、妨害や困難はつきものです。もし、私たちがそのつどあきらめていたら、何事も成し遂げることができません。ペリー提督は七回、北極を目指しましたが、すべて失敗しました。しかし、あきらめないでもう一度挑戦し、八回目に北極点に到達しました。エディソンは電球のフィラメントを見つけるのに、なんと 1600 もの材料を試し、最後に日本の竹から作ったものを使ってやっと電球を灯すことができました。ユリシーズ・グラントは、軍務についている時に酒を飲み、酔っ払ったため、軍を辞めさせられ

ました。それでビジネスをしましたが、失敗し、農業も試してみましたが、それも失敗しました。彼は、働き盛りの四十代に、薪ひろいをし、それを道端で売っていたのです。しかし彼はあきらめませんでした。南北戦争のときリンカーンに認められ東部戦線の指揮官となりました。リンカーンが暗殺され、副大統領だったアンドリュー・ジョンソンが第17代大統領となりましたが、ユリシーズ・グラントは彼の後、第18代大統領となり、二期つとめるまでになったのです。

イエスは種蒔きの譬の中で、岩地に落ちた種と、茨の中に落ちた種について説明して言われました。「また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」（マタイ 13:20-22）人は「困難や迫害」という外から来るもの、また「この世の心づかいと富の惑わし」という内から来るものにどんなに弱いかを、イエスをご存知でした。「私は大丈夫」と言っている人が案外、真っ先にくじけてしまったり、思い煩ったり、誘惑に負けてしまったりするものです。だからこそ、私たちは、自分の力に頼るのではなく、神の力に信頼するのです。私たちは困難に直面する時、じたばたしがちですが、そんな時こそ、神を想い、神に

祈って、静かに時を待つのが良いのです。そうする時、私たちはつまづきやあきらめから立ち上がり、困難を乗り越え、妨害に負けずに歩むことができるようになるのです。

## 二、預言による励まし

さて、神殿の再建はまわりの人々によって妨害されましたが、それを一番妨げていたのは、じつは、神の民自身の不信仰でした。信仰を失くしてしまったら、どんなによい条件が揃っていても物事をやりとげることができなくなります。それで、主は、人々の信仰を励ますため、預言者ハガイを通して、人々に語りかけてくださいました。その語りかけはダリヨス王の第二年第六の月の一日から始まって、第七の月の二十一日、第九の月の二十四日にわたっています。それを記録したのが、「ハガイ書」という預言書なのです。

ハガイ 1:1-11 にある最初の預言は、人々に悔い改めを迫るものでした。人々は「まずは自分たちの生活を安定させよう」と考え、それを第一にしましたが、結果は、みじめなものでした。頑張っても、頑張っただけの報いが帰ってこなかったのです。「多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ」（ハガイ 1:6）「あなたがたは多くを期待したが、見よ、わずかであった。あなたがたが家に持ち帰ったとき、わたしはそれを吹き飛ばした。」（同 1:9）と主は言われました。日本のことわざに「骨折り損のくたびれ儲け」というのがありますが、

人々の生活はそのようだったのです。なぜそんなことになったのでしょうか。主は言われます。「それはなぜか。——万軍の主の御告げ。——それは、廃墟となったわたしの宮のためだ。あなたがたがみな、自分の家のために走り回っていたからだ。」（同 1:9）物事は人間の努力だけで達成できるものではありません。私たちの努力は、その上に神の祝福があってはじめて実を結ぶのです。人々は、主の宮のことを後回しにしたため、その祝福を失っていたのです。

ハガイ 1:4 に「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか」（同 1:4）とあります。エルサレムの住宅はたいていは石造りで、材木の少ないこの地方では、「板張りの家」は贅沢なものでした。人々は、材木を自分の家のためには材木を使っても、主の宮のために調達しようとしなかったのです。それで、主は言われました。「山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現わそう。」（同 1:8）この言葉の通り、誰であっても、神のことを第一にすると、その人の生活に祝福がくだります。それは、この時代ばかりでなく、現代も同じです。

人々は、この言葉を聞いて悔い改めました。「悔い改める」とは、方向転換することです。間違った方向に向かっていることを認め、正しい方向に舵を切ることです。人々は、自分たちのことだけに目を向けるようになっていましたが、神の宮のことに目を向けるようにな



りました。妨害や困難だけを見ていましたが、「宮を建てよ」と命じ、そのために力を与えてくださる主なる神を見上げるようになりました。そして、その心を奮い立たせ、「彼らの神、万軍の主の宮に行って、仕事に取りかかった」（同 1:14）のです。

聖書に「奮い立つ」あるいは「奮い立たせる」という言葉は 40 回ほど使われていますが、それは、神が人の霊に働きかけ、勇気や力を与えてくださることを意味しています。「彼らの神、主の御声と、また、彼らの神、主が遣わされた預言者ハガイのことばとに聞き従った」（同 1:12）とあるように、人々は神の言葉に聞き従うことによって、聖霊の力を受けたのです。また、「民は主の前で恐れた」（同 1:12）とあるように、主を恐れることによって、妨害や困難をも恐れず、「仕事に取りかか」ることができました。

私たちが物事をやり遂げることができないのは、たいていの場合、「本当に大丈夫なんだろうか。うまくいかなかったらどうしようか」などという恐れに捕まえられ、そこから先に進もうとしないからです。同じところで足踏みしていても前に進むことはできません。信仰のことではとくにそうです。神の言葉によって、また、神の言葉とともに働いてくださる聖霊に心を奮い立たせられて、一步を踏み出そうではありませんか。

### 三、神による成就

エズラ記は、神殿工事が再開されたことを次のように書いています。「さて、預言者ハガイとイドの子ゼカリ

ヤの、ふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に、彼らとともにおられるイスラエルの神の名によって預言した。そこで、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツアダクの子ヨシユアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた。」（エズラ 5:1-2）これを見たまわりの地域の総督や知事たちは早速、ダリヨス王に訴えを起し「ユダヤの民は、クロス王の命令によって神殿を再建していると言っていますが、ほんとうにクロス王からの命令があったかどうか、お調べください」と書き送りました（エズラ 5:17）。反対者たちは、クロス王の勅令など見つかるはずがないと思っていたのです。

ところが、ダリヨス王が記録を調べさせたところ、神殿再建についてのクロス王の命令が見つかったのです。そこで、ダリヨス王は、ユダヤの人々を訴えた総督や知事たちに、神殿再建の費用を負担し、貢物を出すようにと命じました。さらに、その命令に背くものは死刑にするという罰則までも定めたのです。ユダヤの人々を訴え出た人々には、それが「やぶへび」になったのです。ユダヤの人々は、政治的な働きかけによってではなく、ただ神に信頼し、神の言葉に従って「仕事にとりかかり」ました。神は、その信仰に報いて、ダリヨス王の心を動かし、万事を益にしてくださったのです。

このようにして、神殿は、「ダリヨス王の治世の第六年、アダルの月の三日」（エズラ 6:15）、工事の再開か

ら五年目に完成しました。エズラ 6:14 には「ユダヤ人の長老たちは、預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの預言によって、これを建てて成功した。彼らはイスラエルの神の命令により、また、クロスと、ダリヨス…の命令によって、これを建て終えた」とあります。聖書は、「預言者ハガイとイドの子ゼカリヤの預言によって」、「イスラエルの神の命令により」、また、「クロスと、ダリヨス…の命令によって」主の宮を建て終えたと言っています。「ペルシャ王の命令」よりも、「神の命令」を先に置いています。神殿の再建には、総督ゼルバベル、大祭司ヨシュア、預言者ハガイとゼカリヤ、クロス王やダリヨス王、そしてペルシャから帰ってきた五万人の人々など、大勢の人が関わっています。しかし、それらの人々を動かし、王たちを導き、預言者に言葉を与えたのは神です。この神が命じられるとき、物事はその言葉とおりに実現していくのです。イザヤ 55:10-11 にこうあります。「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」

神はイスラエルの人々を励まし、その信仰に報いて、神殿を再建させてくださいました。同じ神が、今も、私たちに、力ある言葉で語りかけておられます。神のためになすべき務めを果たすようにと励ましてくださってい

ます。私たちがそれに答えて与えられた務めにとりかかるなら、神がそれを完成させてくださると約束してくださっています。神殿の再建を成し遂げた人々と同じように、私たちも、この神の言葉に聞き従い、神の言葉が実現するのを見せていただきますよう。

### (祈り)

主なる神さま。あなたは御言葉によりすべての物を造り、世界を導いておられます。私たちが行き詰まりを覚えて悩む時や、自分の限界を感じて嘆く時、あなたの力ある言葉によって、そこから立ち上がらせてください。そして、御言葉の約束の通りの幸いと祝福とを見ることができるよう、導いてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。

# ネヘミヤの祈り

ネヘミヤ 1:4-11

1:4 私はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、

1:5 言った。「ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜わる方。

1:6 どうぞ、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもベイスラエル人のために、昼も夜も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエル人の罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。

1:7 私たちは、あなたに対して非常に悪いことをして、あなたのしもベモーセにお命じになった命令も、おきても、定めも守りませんでした。

1:8 しかしどうか、あなたのしもベモーセにお命じになったことばを、思い起こしてください。『あなたがたが不信の罪を犯すなら、わたしはあなたがたを諸国民の間に散らす。

1:9 あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行なうなら、たとい、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住ませるためにわたしが選んだ場所に、彼らを連れて来る。』と。

1:10 これらの者たちは、あなたの偉大な力とその力強い御手をもって、あなたが贖われたあなたのしもべ、あなたの民です。

1:11 ああ、主よ。どうぞ、このしもべの祈りと、あなたの名を喜んで敬うあなたのしもべたちの祈りとに、耳を傾けてください。どうぞ、きょう、このしもべに幸いを見せ、この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように。」そのとき、私は王の献酌官であった。

ネヘミヤ記には、エルサレムの城壁がネヘミヤのリーダーシップと人々の一致によって建て直されたことが書かれています。ダラス神学校の校長だったチャック・スウインドール先生は “Hand Me Another Brick” という本で、ネヘミヤ記からクリスチャンのリーダーシップについて書いています。ベストセラーとなった “The Prayer of Jabez” の著者、ブルース・ウィルキンソン先生も、“The Vision of the Leader” というレッスン・ビデオをネヘミヤ記から作っています。ネヘミヤ記は、リーダーシップやヴィジョンといったことも学ぶことができる大変興味深い書物ですが、きょうは、ネヘミヤの祈りに焦点を合わせて学んでみたいと思います。というのは、エルサレムの城壁の再建は、ネヘミヤの祈りから始まり、祈りによって成し遂げられたからです。

## 一、信仰の祈り

ネヘミヤの祈りはどのような祈りだったのでしょうか。第一に、彼の祈りは「信仰の祈り」でした。神殿が再建されて、すでに70年経っていましたが、エルサレムの城壁は壊れたままで、そこに住むユダヤの人々は、他の民族から圧迫を受けていました。そのことを知ったネヘミヤは心を痛め、ネヘミヤ記 1:5-11 に記されている祈りを祈りました。

その祈りで、ネヘミヤは「天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜わる方」（5）と神に呼びかけました。これは、神への信仰告白の言葉です。「祈り」

は「願い」だけではありません。そこには、賛美、感謝、悔い改め、願い、とりなしといった要素があります。「神さま」という呼びかけの中には、すでに、「私はあなたを信じます」という信仰の告白や「私はあなたを信じたいのです」という信仰を求める思いが含まれています。そのような意味では、礼拝で唱える「使徒信条」もまた祈りのひとつだと言えるでしょう。私たちは「使徒信条」を唱える度に、「神さま、あなたは全宇宙を創造し、地球に生命を生み出した全能のお方です」と、神への信仰を言い表し、神を賛美するのです。

すべての人をお造りになった神はどの人にも「祈り」の心をお与えになりました。人間だけが祈ることをします。また、人は誰に教えられなくても祈るようになります。無神論者でさえ、いざという時には祈ると言われています。それは、神が、聖書にある通り、人間を「神のかたち」に、また、神に向けてお造りになったからです。どの人にも祈りの心があります。どの人もさまざまな形で祈っています。しかし、誰に祈るのかを知らないため、何をどう祈ったらよいか分らず、確かな祈りを捧げることができないでいるのです。人が持っている「祈る心」はまことの神を知るまでは満足することがないのです。

こんな話があります。ある町に、スミスさんという人がいました。その日は彼女の誕生日でした。その町の花屋が注文を受けて、スミスさんに誕生日の花束を届けに行きました。注文を受けた時に聞いた住所に行き、その

家にいた女性に花束を渡し「ハッピー・バースディ、ミセス・スミス」と歌いました。その女性は、にっこりしてこういいました。「ありがとうございます。でも、きょう誕生日を迎えるのは、私の母で、先月、私のお婆のところに引っ越したんですよ。悪いけど、通りの向こうの、あの家に届けてくれませんか。」陽気な花屋は、「そうですか」と言って、花束を持ってその家に入りました。そして、出てきた女性に花束を渡し「ハッピー・バースディ、ミセス・スミス」と歌いました。けれども、それはスミスさんの妹でした。「ミセス・スミスは、車椅子に座っている、あの人ですよ。」そう言われて花屋は、改めて花束をミセス・スミスに渡し、「ハッピー・バースディ、ミセス・スミス」と歌いました。

この一部始終を見ていた近所の人が「スミスさんでない人に歌ったりして、おまえはなんてまぬけなんだ」と花屋にいいました。すると花屋はこう答えました。「ええ、私は、スミスさんでない人に歌ってしまいましたが、それでも、私は歌うたびにスミスさんを心に描き、スミスさんに向かって歌っていましたよ。本人を目の前にした時は、今までの思いを全部込めて歌いましたけどね。」

まだ、まことの神を知らない人も、懸命に願い、祈ります。時には神を信じる人よりも熱心で真剣な場合もあるでしょう。しかし、そうした人たちがまことの神を知るようになったなら、「ああ、私の心はずっとこの方を求めていたのだ。今、やっと私は祈りを聞いてくださる



お方を知って、ほんとうの祈りができるようになった」と言うことができるようになることでしょう。

イエスはサマリヤの女性に「わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています」（ヨハネ 4:22）と言われました。サマリヤの女性はそれに答えて「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう」と言いました。するとイエスはそれに対して「あなたと話しているこのわたしがそれです」、つまり「わたしがキリストです」と言われました（ヨハネ 4:25-26）。キリストはすでに来られ、世界中のどの人も、聖書によってまことの神を正しく知ることができるようにして下さったのです。

私たちも、聖書に教えられ、神がどのようなお方なのかをもっと知りましょう。そして、聖書によって教えられたとおりに、神を呼んでみましょう。漠然と「神さま」と祈るのではなく、生きておられ、私たちに目を向け、祈りに耳を傾けてくださるお方に向かって、「私を愛して下さった神さま」「私を導いてくださる神さま」「すべての善いものを与えてくださる神さま」などと祈ってみましょう。そうした呼びかけを神は喜んでくださいます。

## 二、悔い改めの祈り

第二にネヘミヤの祈りは「悔い改めの祈り」でした。ネヘミヤは「まことに、私も私の父の家も罪を犯しまし

た。私たちは、あなたに対して非常に悪いことをして、あなたのしもべモーセにお命じになった命令も、おきても、定めも守りませんでした」（1:6-7）と祈りました。ネヘミヤはバビロン捕囚からおよそ100年以上もたってからペルシャで生まれた人でした。ネヘミヤ自身は捕囚という罰に値いするような罪を犯してはいません。しかし、彼は、神の民全体の罪を自分の罪として悔い改めました。これは、じつにへりくだった祈りです。ネヘミヤは、人間には、神に『こうして欲しい』と願い出る何の権利もないことを知っていました。そして、その上で神のあわれみを求めました。

祈りとは自分の願いを神に押し付けることではありません。まして、神に「こうしろ」「ああしろ」と命令することではありません。すべてのものの主権者である神は、人間に命令を与えることができますが、人間が神に命令することはできません。日本のある地方には「縛り地蔵」というのがあって、地蔵を縄で縛り、馬で引き回すのだそうです。「おらたちの願いを聞かねえと、ひどい目にあわすぞ」と、日頃、手を合わせて願をかけている地蔵を脅迫するわけです。私たちも神の前にへりくだって悔い改めることを忘れると、主権者である神に命令するようなことをしてしまいかねません。

ルカ18章の「取税人」は「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」（ルカ18:13）と祈りました。そして、イエスは、自分の功績を誇らず、自分の罪を認めて、ただ神のあわれみを求める切実な祈りが神に受け入

れられると言われました。神には私たちの祈りに答える  
どんな義務もありません。祈りが聞かれるのはただ神の  
ご真実とあわれみによるのです。天からの雨は高いところ  
にはとどまらず低いところへと流れていきます。その  
ように、神の恵み、あわれみ、祝福は、悔い改め、へり  
くだり、あわれみを求める人へと注がれるのです。

### 三、不断の祈り

第三に、ネヘミヤの祈りは「不断の祈り」(Unceasing Prayer)、絶えず祈る祈りでした。ネヘミヤは、エルサレムの復興のために、日々祈り続けました。

ネヘミヤ記 1:11 でネヘミヤはこう祈りました。「どうぞ、きょう、このしもべに幸いを見せ、この人の前に、あわれみを受けさせてくださいますように。」「この人」というのは、ペルシャ王アルタシャスタのことで、一般の歴史では「アルタクセルクセス」の名で知られています。ネヘミヤは王の「献酌官」でした。「献酌官」といっても王に酒を注ぐことだけが仕事ではありません。王の側近くにおいて、政治にも関わっていました。ネヘミヤは、ユダヤ人である自分にそのような立場が与えられているのは、エルサレムの復興を王に願い出、そのために働くためであると確信しました。それで、自分がエルサレムに行くことについて、王の許しが出るよう、神に願い祈り続けていたのです。

ネヘミヤがエルサレムの現状を聞いて、そのために祈ったのはアルタシャスタ王の第二十年の「キスレウの月」(ネヘミヤ 1:1) でした。ネヘミヤが「献酌官」とし

て王の側近くに行く機会を得たのは「ニサンの月」（ネヘミヤ 2:1）でしたから、ネヘミヤは「キスレウ」から「ニサン」までの四ヶ月の間、祈り続けたこととなります。

ネヘミヤの心はエルサレムのことでいっぱいになっていましたので、王の前でしおれていました。それで、王から「あなたは病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように悲しい顔つきをしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない」（2:2）と言われてしまいました。ネヘミヤは王を不機嫌にさせたのではないかと恐れましたが、正直に自分の心の中にあることを話すと、王は「では、あなたは何を願うのか」と言いました。王はネヘミヤに「願いを聞き入れよう」と言ったのです。王がこんなにも寛大な申し出をしたのは、神が王の心に働きかけてくださったからでした。「この人の前に、あわれみを受けさせてください」という祈りが聞かれたのです。

「そこで私は、天の神に祈ってから、王に答えた」（2:4-5）とあるように、ネヘミヤは、王の申し出を聞いたとき、心の中で、一瞬のうちに祈りました。このような即座の祈りは、いつも祈っていなければできません。聖書は「絶えず祈りなさい」と教えていますが、それは、どんな仕事もせずに、目覚めたときから眠るときまで祈り続けるということを言っているわけではありません。一日の中には祈りの時間があり、労働の時間があり、休息の時間があり、また生活の時間があります。そうした時間を正しく配分し、規則正しく守っ

ていくことはとても大切なことです。しかし、祈りは、祈りの時間だけで終わるのでなく、働くときも、休むときも、私たちの心の中にあるべきものなのです。祈りの心で働き、祈りの心で休むということです。そうした祈りがあったら始めて、大切な場面で神の導きを得ることができるのです。「不断の祈り」は「普段の祈り」でもあるのです。日々に生活のどんな小さなことでも祈っていくということです。普段祈っている人は、いざという時、力ある祈りができ、祈りの答を見ることができるようになります。そのような祈りによって、神に祈ることのできる幸いを味わい、神が祈りに答えてくださる恵みにあずかりたいと思います。

### (祈り)

真実であわれみ深い神さま。私たちはあなたに要求する何の権利も持っていませんが、あなたの真実に信仰をもって答え、へりくだってあなたのあわれみを求めるとき、あなたは、私たちの祈りに聞いてくださると約束されました。そのことを信じて祈り続ける私たちとしてください。私たちに祈るべきお方を教えてくださったイエス・キリストのお名前です。

## “I Love You.”

マラキ 1:1-5

1:1 宣告。マラキを通してイスラエルにあった主のことば。

1:2 「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。——主の御告げ。——わたしはヤコブを愛した。

1:3 わたしはエサウを憎み、彼の山を荒れ果てた地とし、彼の継いだ地を荒野のジャッカルのものとした。」

1:4 たといエドムが、「私たちは打ち砕かれた。だが、廃墟を建て直そう。」と言っても、万軍の主はこう仰せられる。「彼らは建てるが、わたしは打ちこわす。彼らは、悪の国と言われ、主のとしえにのろう民と呼ばれる。」

1:5 あなたがたの目はこれを見て言おう。「主はイスラエルの地境を越えて偉大な方だ。」と。

### 一、66 卷の聖書

聖書は、ひとりの人が初めから終わりまで書いた一冊の書物ではありません。およそ 1500 年もの長い間に、大勢の人の手によって書かれた様々な書物が集められたものです。聖書には、キリスト以前に、ユダヤの人々によって書かれた「創世記」から「マラキ書」までの 39 の「旧約」の書物と、キリストの弟子たちによって書かれた「マタイの福音書」から「ヨハネの黙示録」までの 27 の「新約」の書物があります。旧約の書物の数と、新約の書物の数は「 $3 \times 9 = 27$ 」と覚えると良いでしょう。

「旧約」「新約」の「約」は「契約」あるいは「約束」の「約」です。その「契約」とは、「わたしはあな

たがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」  
（出エジプト 6:7、レビ 26:12、エレミヤ 30:22、エゼキエル 36:28 など）という、神と人との契約です。神は、アブラハムを選び、その子イサクを選び、またその子のヤコブを選び、ヤコブの子孫をエジプトの奴隷から救い出し、モーセを通して彼らと契約を結び、彼らをご自分の民としてくださったのです。

ところが、ユダヤの人々は一方向的に神との契約から離れてしまいました。けれども神は、ご自分の契約を破棄しませんでした。それを保ち続け、モーセによって結ばれた古い契約（旧約）をイエス・キリストによって更新し、新しい契約（新約）としてくださったのです。新約ではユダヤの人々ばかりでなく、イエス・キリストを信じる者は、誰でも「神の子ども」また「神の民」とされるのです。

聖書の「約束」とはひとことで言えば、「救い主キリスト」です。旧約は救い主が来られることを預言するもので、新約は預言の通りに、キリストが来られ、救いが成就したことを告げるものです。そういう意味では、旧約は「約束篇」、新約は「成就篇」です。物語でいうなら、旧約は「予告編」、新約は「完結編」です。アウグスティヌスは「新約は旧約の中に隠されており、旧約は新約の中に表されている」と言いました。旧約なしに新約を正しく読むことはできませんし、新約なしには旧約は意味を持ちません。

旧約は新約の三倍以上もの分量があるので、敬遠されがちですが、順を追って読み進んでいくことをお勧めします。その時、旧約のそれぞれの書物の主な出来事や人物を覚えておく良いでしょう。たとえば「創世記」なら天地創造、アダムとエバ、カインとアベル、ノアと洪水、アブラハムとイサク、ヤコブとヨセフ、「出エジプト記」なら、モーセ、過越、十戒、幕屋などです。モーセ以後では、ヨシユア、サムエル、ダビデ、ソロモン、エリヤ、エリシャ、イザヤ、エレミヤといった人々、そしてバビロン捕囚と神殿再建といった出来事が大切です。こうした聖書の大きな流れについては、別に学ぶ機会があればと願っています。

## 二、マラキの時代

さて、きょうは、旧約の最後の書物、「マラキ書」の初めの部分を読みました。預言者マラキその人については、詳しいことは知られていませんが、彼が預言した時代は、マラキ書の内容から特定することができます。それはエルサレムの城壁を再建した総督ネヘミヤや人々に律法を教えた学者エズラと同じころでした。

ネヘミヤは城壁の再建を果たしたあと、いちどペルシャに帰り、再びエルサレムにやってきました（ネヘミヤ13:6-7）。すると、城壁の再建をさんざん妨害したアモン人トビヤに、こともあろうに、聖なる神殿の部屋のひとつがあてがわれていたのです。トビヤはユダヤの人々に親族の娘たちを嫁がせ、姻戚関係を築いてユダヤの人々の中に入り込んできました。それは友好関係を持つ



ためではなく、自分の影響力を強めて、エルサレムを手に入れようとするためでした。ユダヤの人々の中には、そうした地元の有力者と結びつき、妻を離縁し、彼らの娘たちと結婚する者もありました。エズラやネヘミヤはこの問題と取り組みました。マラキもまた、「あなたの若い時の妻を裏切ってはならない。『わたしは、離婚を憎む』とイスラエルの神、主は仰せられる」（マラキ 2:15-16）と預言しています。

いつの時代でも、平穏で生活が安定すると信仰が生ぬるくなるものです。マラキの時代には、祭司たちでさえ律法の規定にかなわないものを捧げ（1:8）、人々も神への捧げものを惜しんでいました（3:8）。神への信仰が軽んじられるとき、決まって、社会に不正がはびこるのですが、この時代にも、労働者に正当な賃金が払われなかったり、やもめ、みなしご、在留異国人が苦しめられたりしていました（マラキ 3:5）。イスラエルの国は、そうしたことのために滅びたのに、またもや同じことを繰り返しているのです。エルサレムの人々は神の恵み、あわれみによってバビロンから帰り、苦労を重ねて神殿を立て直し、城壁を修理し終えました。しかし、神殿が再建され神殿での礼拝が再開されていても、人々の信仰はまだ建て直されておらず、神への礼拝の心は養われていなかったのです。目に見える城壁は修理されても、信仰の生活を守る心の城壁は、破れ、壊れたままだったのです。

私は教会堂の建築や改築に何度か関わったことがあります。教会堂の建築や増改築は簡単なことではありません

ん。建築委員会で何度も会合を重ね、会員総会に諮り、市の許可を受け、ファンドレイズンのため奔走しなければなりません。また、背後でどれほどの祈りが積み重ねられたことでしょうか。そうした労苦が実ってやっと教会堂が出来上がるのですが、じつは、もっと労苦の大きいのは、目に見えない「教会」の霊的な建設です。神の民、キリストのからだ、また、聖霊の宮としての「教会」を建て上げることは、「教会堂」を建てるよりも、もっと難しいのです。「使徒の働き」には「教会堂」建築のことは書かれていません。資産家の信者から邸宅の一部を提供してもらったり、大きな家を借りたりして、それを教会堂としていました。聖書に書かれている使徒たちの味わった苦しみは、会堂を建てるためではなく、「キリストのからだ」である教会を建て上げるための苦しみでした（コロサイ 1:24）。

マラキもまた、神殿があることを誇り、城壁があることに安心している人々に、その思いを神殿からその中で行われる礼拝へ、その目を城壁からその中での生活の営みへと向けるようにと教えています。

### 三、愛の問いかけ

マラキの預言はとても特徴的で、神の問いかけと人々の返答が組み合わされています。それが1章で2回、2章で1回、3章で3回、合計6回出てきます。1:6では「どこに、わたしへの恐れがあるのか」という神の問いと「どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか」という人々の返答があります。2:17には「あなたが

たは、あなたがたのことばで主を煩わした」という言葉と「どのようにして、私たちは煩わしたのか」という返答、3:7では「わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう」という呼びかけと「どのようにして、私たちは帰ろうか」という返答、3:8には「あなたがたはわたしのものを盗んでいる」という叱責と「どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだのでしょうか」という答えがあります。

神が人々の罪を指摘されるのは、人々がそれを悔い改めて、その罪を赦され、そこからきよめられるためです。それは大きな神の恵みであるのに、人々はこんなふうに返答したのです。「どのようにして、あなたの名をさげすみしましたか。十分敬っているではありませんか。どのようにしてあなたを煩わせましたか。神様、あなたが勝手にいきり立っているだけではありませんか。私たちはもう神のもとに帰っています。なのに、なぜまだ『帰れ』と言われるのですか。」人々は、ことごとく神の語りかけを突き返しています。じつに固い心のままです。それで神が「あなたがたはわたしにかたくななことを言う」と言われると、人々は「私たちはあなたに対して、何を言いましたか」と平気な顔で言うのです(3:14)。これ以上のかたくなで頑固な返答はないでしょう。

こうした箇所は、客観的に読むだけなら、「この人たちはなんと頑固で、愚かなのだろう」と、他人事で済ませられます。しかし、それが、自分に向けられたものであれば、私たちは、それにどう答えるのでしょうか。い

や、実際、神は、罪を犯したアダムに「あなたはどこにいるのか」（創世記 3:9）と呼びかけて以来、私たちひとりびとりに、日毎に呼びかけ、語りかけてくださっているのです。私たちは、それにどう答えてきたでしょうか。

「わたしはあなたがたを愛している」（1:2）という神の呼びかけは、神の人への呼びかけの要約です。聖書は「神の言葉」、神から人への呼びかけですから、「わたしはあなたを愛している」というのは、聖書の要約であると言ってもよいでしょう。アメリカでは “I love you.” は挨拶のように頻繁に使われます。しかし、人間の愛には偽りの愛もありますし、「あなたがこうしてくれたら愛してあげましょう」という条件付きの愛がほとんどです。たとえ真実なものであっても、人間の真実には限界があります。しかし、神の愛は人間の愛とは違います。それは永遠に変わらない力強い愛です。きょうの箇所では、神は、ご自分の愛を伝えるために、「ヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と言われました。これは、エサウが長子であったのに、弟のヤコブがイスラエルの先祖となったという、ユダヤの人なら誰でも知っていることを言っています。ここでは、神が兄が家督を継ぐという「条件」に従ってではなく、無条件に、弟という、あえて劣ったものを選んだということが強調されています。神の民は、神の無条件の愛によって選ばれ、愛されてきたのです。そうであるのに、ヤコブの子孫が「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか」と答えているのはいったいどうしたことでしょうか。神は言われま

す。「あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ 43:2-4）

「たとえ火の中、水の中」という言葉がありますが、神はそれほどに、神の民を愛してこられた。なのに、神の民は、その愛に全く答えなかったのです。

今日の神の民、キリストを信じる者には、神がご自分のひとり子、イエス・キリストを賜ったほどの愛が注がれています。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

（ヨハネ第一 4:10）「ここに愛がある。」どこに？「十字架の上に」です。人間の愛はハートの形で表わされますが、神の愛は十字架の形で表されているのです。十字架以上に神の愛を物語るものはありません。

こんな話があります。ある人が夢を見ました。その人はあることがらでたいへん苦しみ、神の愛を信じられなくなっていました。そんな時、夢の中にイエスが現われ、「わたしはあなたを愛している」とその人に語りかけました。その人は、夢の中で「イエスさま。あなたが私を愛しておられることが分かりません。いったいどれくらい私を愛しておられるというのですか」とイエスに言いました。すると、イエスは、両手をいっぱい広げて、「これくらいだよ」と言い、そのまま、その両手に釘

を受けて十字架にかかられました。その人はそこで目覚め、イエスの十字架の愛を受け入れたということです。

私たちも、この愛によって救われます。自分は誰からも愛されていないと感じている人は決して他の人を愛することはできません。子どものころ十分な愛を受けなかった人や偽りの愛に裏切られてきた人は特にそうです。けれども、そのような人も、神の愛を受けるとき、過去の傷がいやされます。神と人ともに愛され、神と人を愛する、幸いな人生に導かれます。

「わたしはあなたを愛している。」旧約の締めくくりはこの言葉があるのは意味深いことです。私たちは、神の愛の「広さ、長さ、高さ、深さ」（エペソ 3:18）を、さらに教えられ、その愛に答えていきたいと思えます。

### （祈り）

愛の神さま。あなたは、聖書によって「わたしはあなたがたを愛している」とおおやけに宣言し、聖霊によって「わたしはあなたを愛している」と、ひとりひとりに個人的に語りかけてくださっています。私たちがその愛の呼びかけをかき消すことがないように、あなたの愛の呼びかけに、精一杯の愛を込めて、応答することができるよう、助けてください。主イエス・キリストのお名前です。

## 福音と日本文化 ⑥ 一あとがきにかえて

明治初期、三つのキリスト者青年たちのグループが生まれました。それぞれは「横浜バンド」、「熊本バンド」、「札幌バンド」と呼ばれました。

「横浜バンド」はバラ宣教師の働きによって生まれたもので、代表的な人物として植村正久（富士見町教会牧師）をあげることができます。

「熊本バンド」は、熊本藩洋学校の教師として招かれたジェーンズ宣教師を通して信仰に導かれた35名の青年たちのグループのことです。宮川経輝（後の大阪教会牧師）、海老名弾正（後の本郷教会牧師、熊本英学校・女学校創設者）らは1876年（明治9年）、熊本の花岡山に登り「奉教趣意書」を作り、信仰の誓約を交わしました。彼らは、熊本で迫害を受け、洋学校も閉鎖されたため、新島襄が設立した京都の同志社に移りました。

クラーク宣教師は1876年（明治9年）札幌農学校で、わずか8ヶ月しか教えませんでした。彼の感化を受けた札幌農学校一期生15名は「イエスを信じる者の誓約」を交わし、函館のハリス宣教師からバプテスマを受けました。これが「札幌バンド」です。札幌農学校の二期生だった新渡戸稲造（後の第一高等学校校長、国際連盟事務次長）や内村鑑三は、先輩の感化によってキリスト者となりました。内村鑑三は「無教会主義」を取りましたが、立場の違う人々とも協力して大正期の伝道に励んでいます。

このように神は、日本に青年キリスト者を起こし、彼らを新しい時代のために用いてくださったのです。

中尾フィリップ



**Penguin Club**

[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)